

TOKYO美人と、東京100ストーリー

心は翼 連載⑦・最終回 (015 飯田橋)

穂 高 健 一

井伊佳元は小学生の文集をみていた。それは従業員が閲覧いつでもできるように、休憩室におかれていた。

写真は生徒たちが寿司ロボットをのぞき込む姿を捉えていた。それは久能幸子教師が撮影したもので、子どもたちの嬉々とした表情だった。

井伊の店内専用のPHSが鳴った。

鳴野さんからです、と事務員がいい、転送されてきた。いま成田空港に着いたという連絡で、インドでは母親に会えたという。

「こんな親っているのでしょうか。21年まえのことはもう忘れなさい、と冷たく突き放されてしまいました。わたしのトラウマを理解してくれる態度など、一切ありませんでした」

佐和子の胸のなかには、淋しい風が吹いているようだった。



「そうか。できれば、明日にでも会って、くわしく話を聞きたい」
「申し訳ありません。いい加減さんに、話すことは何一つないんです。まるで木で鼻をくくったように、もうインドに来ないで、ヨガの修行のじやまよ、と追い払われました。父方の祖父母が、幼い私を奪い取って育てたから、もう母子じゃない、そんな態度でした」

「インドの母親は心のなかで泣いているさ。傷ついた娘がかわいそうだ、哀れだと……。ちよつと場所を移すから」

椅子から立ち上がった井伊は、右膝のじん帯を傷めており、やや不自由な歩き方だった。休憩室を出ると、廊下を曲がった先の鉄扉を開けた。無人の空洞の非常階段で、ふだんはだれも来ない場所だった。

この間、井伊の脳裏には、インドに出むくまえ佐和子にさずけた、母親への質問が横切った。……少女の身柄引渡しのはどこだったのか。無事に保護されたとき、少女・佐和子の着衣はどう変わっていたのか。

誘拐事件は脅迫状、写真、テープがとどく場合が多いというが、その点はどうかだったのか。

「お待たせ」

その声が空洞に木霊するようにひびきわたった。

「犯人と同様に、私は両親を恨んでいます。21年まえに、両親



が警察に、娘はもどってきました、と届けていてくれたならば、誘拐犯はその段階で捕まっていたはず。いまのわたしは、こんなに苦しむ必要はなかったのに……」

佐和子は、こみ上げてくる嗚咽を抑えているようだ。

「身柄解放の条件として、『警察にしゃべるな、しゃべって捕まっても、出所したら娘を殺しにくぞ』、というものだったら、親は犯人の常套句だとわかって、わが子かわいさから、警察に駆け込めなかった。おれはそう思うけどな」

「いい加減さんは、わたしの親を買いかぶりすぎています」

「そうかな？」

「母が口を閉ざしたからには、もう有力な証人がいません。父はあたるだけ、むだな人です。こんかいこそ完全犯罪の成立で、迷宮入りです。結局、わたしは心に翼がないまま、一生、悪魔におびえた人生を送ることになるんです」

「残念な気持ちはおれもおなじだ。しかし、そう悲観したものじゃない。容疑者は3人まで絞り込めている」

「そうでしょうか？ 21年前の3月15日、蓼科ロープウェイ山頂駅にいた人はもつと沢山いたはずです」

「たしかに、観光客を含めて大勢いただろう。しかし、誘拐犯はひとりだ」

「……。ところで、おケガのほうはいかがですか」

彼女が肝心なことを訊くのを忘れていたという口調になった。「だいじょうぶ。だいじょうぶなつたよ。関節のじん帯を痛めただ

けだから」

「硫黄岳で、いい加減さんを殺そうとしたひとが誘拐犯と同一人物だと、わたしは考えています」

「とはいっても、だれがおれを狙ったか、わからない」

「裏稼業人の命まで狙うなんて……。怖い」

「おれは明日休みだ。時差ぼけが問題なければ、会いたいんだが？」

ふたりは駒込駅の改札で、午後2時に会う約束を交わした。

井伊が非常階段から、ふたたび休憩室にもどりかけたとき、PHSが鳴った。子どものゲーム機が壊れたから、見てほしいという。休憩時間でも、おかまいなしに、仕事に

回されてくる。その現場を見、業者に電話してから、かれは休憩室にもどり、自販機でコーヒーを買ってから椅子に座った。

「おれを殺そうとした奴はだれだ？」

いまから3週間まえの硫黄岳の出来事が思いつく。

本沢ロッジの小屋から逃げて、夜にはひとりテントを張り、シラフ（寝袋）に入った。

真夜中、ふいに目覚めた。それは動物的な警戒心に似た、目覚めだったと思う。雪を踏みしめた音がテントに近づいてきた。足を忍ばせている、不気味な雪の音だ。登山ナイフか、ピッケル、ストックで、おれの胸を刺すつもりかもしれない。得体の知れな



い恐怖が全身を駆けめぐった。

シラフから抜けだした井伊は、防寒着を着込み、すぐさまテントの外に逃げた。

翌朝の空は澄み渡り、陽が水平線のうすい雲間から昇ってきた。井伊はテントからの不審な足跡をたどってみた。その足跡は迷うことなく本沢ロッジにつながっていた。

(3人のうち、一人がおれの命を狙ったのだ)

井伊は自分にいっそうの警戒心をもとめた。

6時半になると、朝食をすませた井伊はテントを撤収した。そのうえで、12本爪アイゼンを装着し、ピッケルを手にした。

他の3人とともに硫黄岳(2760メートル)の山頂をめざした。

本沢の露天風呂の脇からみあげた、屹立する硫黄岳の北面は、噴火跡の荒々しい断崖絶壁だった。

最初の目標は夏沢峠(2402メートル)だった。この間にも、井伊はあらためて一人ひとりを疑ってみた。

トップに登るのはスキー板をかついだ山崎勉だ。5歳の少女が軟禁された、本沢ロッジをだれよりもよく知る。2週間くらいなら、人知れず少女を閉じ込められる。山崎は口から出まかせにしゃべる男だ。もし、こいつが犯人だ、という確証を得ても、口先で巧妙に逃げまわるから、厄介な相手になるだろう。

しかし、山崎は大ほら吹きで口がかるいし、21年間も沈黙を守りつづけるのはムリだろう。

2番手で登るのは与謝野副校長だった。かれは軽アイゼンで、

スパッツもつけておらず、装備が最も貧弱。きょうの山岳は快晴の下だから、登れるようなものだ。与謝野は雪上の歩きかたすら満足に知らないから、体力をムダに消耗している。夏沢峠に着くころには顎が上がっていた。

こんな力量のない男が、雪山で5歳の少女を連れまわせるはずがない。まして事件当日、かれはレンタカーで6人の12歳の少年や少女を案内していたのだから。

夏沢峠では小休止したあと、稜線のトレース(雪道)をすすむ。森林限界を超えると、寒風が雪上を吹きあげていた。

3番手を登るのは三枝店長だ。力強い余裕がある登りかただった。この男は21年まえに、八ヶ岳連峰を縦走してきて、山頂駅で、5歳の鳴野佐和子に出会っている。その先の行動は不明瞭だ。

誘拐した少女を山小屋に監禁し、本人は八ヶ岳の山をあちらこちらに登っていたとも考えられる。セーフティーの入社式が近づいてきたので、下山し、少女の親に電話をかけたと思われる。『本沢ロッジで、お宅のお子さんを発見したから、山麓まで連れて下りてあげたよ』と、善意ある第三者の口調で語った。そんな疑問がぬぐえない。



『おなじ会社のおなじ山岳部員なのに、犯人あつかいした。井伊がムカつく。許せない』

三枝は夜が明けても、そんな不機嫌な態度だった。

山頂を見あげると、時おり流雲からの強風でうすいガス（雲）がかかる。流れ去ると、からつと青空になる。変化のはげしい光景だ。足もとはツルツルのアイスバーン。登るほどに酸素はうすく、息が乱れてくる。

ケルン（2650メートル）にたどり着いた。風が強くて、その雪は吹き飛ばされ、ロック（石）が露出していた。山頂までの標高差は100メートル。息切れのはげしい与謝野が、もう登れないといい、ケルンのそばに腰を下した。投げだした1本のストックがアイスバーンで滑りだす。最後尾にいた井伊がさつと受け止め、与謝野の手もとにとどけた。

「すこし休もう」

スキー板を立てた山崎が、ザックから飲料水を取りだす。三枝は登山靴のアイゼンの紐をしぼりなおす。井伊は噴火跡の荒々しい絶壁をのぞいてみている。ダム堤のうえから眼下をみるように、垂直に切り立った断崖だった。

（スキーで、こんなところを降りられるはずがない）
山崎がいかにてらめな男か、と再認識させられた。



井伊はなおも断崖絶壁をながめていた。

「痛い。何するんだ」

井伊は背後から、ストックか、ピッケルで太腿を刺された。それから逃げるように前のめりになり、バランスを失って転倒した。そのままアイスバーンで滑って断崖の縁から飛びだした。からだか宙に浮いて、落ちていく。

『ここで死ぬのか』

井伊は言いようのない恐怖で、ぞっとした。

20メートルほど真下に墜落した。背中ザックが落下のクッションになった。井伊は反射的に身体をうつ伏せにし、ピッケルのピックを打ちこんだ。

斜面はまるで垂直に思えた。制動が利かず、加速度がついていく。ゴツゴツした起伏で、全身がバウンドする。ピッケルが飛び跳ねる。止めようもない。

はげしい恐怖に襲われた。

アイスバーンの雪面で両手が伸び、両脇が開いていく。ピッケルを抜き、もう一度ピックを打ち直す。顔面も、登山靴の爪先も、抵抗になるものはすべて使う。ゴア（生地）のヤッケは全身に油を塗ったように滑る。

鳴野佐和子の顔が浮かんた。

『心に翼をつけてやれず、おれは死ぬのか……』

もう一度、佐和子に会って、悪魔に負けず生きていけよ、と声をかけてやりたいが、死ねば、それも叶わない。

身体は滑るというよりも、落ちていく。死にむかって、どんどん滑り落ちていく。

突如として、ピッケルが雪面からでた草付きに食い込んだ。草が抵抗となり、急ブレーキがかかり、身体が停止したのだ。

滑落の高度差はおよそ200メートルだった。いまはダムの急斜面の途中で止まったようなもの。屹立する斜面で気を抜くと、ふたたび滑落する。井伊は静かに立ち上がった。

危険度の高い、トラバース（横の移動）に移った。慎重に一步步つ、一步步つ、時間をかけてすすむ、

稜線に立つと、全身を点検した。ヤッケはかなり破けていた。露出した肌や顔は雪面を滑った火傷で痛む。右膝のじん帯が伸びきったようだ。ただ、裂傷はなかった。高度計の腕時計や腰につけていた携帯電話などは吹き飛んでいた。

ケルンにもどってきた井伊は、3人の顔を一人ずつみた。

「よく生きていたな。断崖から消えたので、もう死んだと思っていた」

3人は遺体の回収方法まで打ち合わせていたと話す。

井伊はだれにも転落、滑落の原因を話さなかった。それは犯人しか知らない事実だから。

井伊はその日のうちに下山し、東京にもどってきた。大学病院でCT検査など受診したが、頭部などには異常がなかった。2週間後の検診も同様だった。

駒込駅で鳴野佐和子と落ち合った井伊は、彼女からインドのお

土産をもらった。ふたりは悪魔の犯行現場の一つ、旧古河庭園にむかった。道々、彼女はインドでの失意を語っていた。

正門までくると、井伊はふたり分の入園券を買いとめた。4月半ばはバラが咲くにはまだ早すぎる。それだけに静寂な園内だった。

「わたしインドの寺院で、鐘の音を聞いて、ひとつ思いだしたことがあるんです。山小屋に閉



じ込められていた日、たぶん最初の夜だったと思うんですが、吊り鐘がカーン、カーン、カーン、と連打されていました。何度も、何度も。それが怖くて、怖くて……、金縛りにあったようになり、そのときから逃げだすことは諦めました」

「鐘といえば、詩のなかにもよく出てきている。一つ、二つ、カーン、カーンと鳴らす音とはちがう？」

「ちがいます。TVか、映画で観た、江戸時代の火消しが『火事だ』『火事だ』と連打するような、半鐘のような荒々しい音です」

「これは重要な証言だ。軟禁場所は本沢ロッジじゃない」

井伊のケイタイが鳴っていたが、かれは無視した。

「えっ。山小屋には吊り鐘があるんでしょう？ 本沢ロッジに3人がきたとき、一人ひとりみな鐘を鳴らしたと、いい加減さんが

お話されてしまったけど？」

「雪山の登山者は、山小屋に着いたからといって、やみくもに吊り鐘を乱打しない。寒くて、寒くて、一刻もはやく室内に入りた
いものだ」

「では、わたしはどこに監禁されていたのでしょうか？」

「考えられるのは、稲子リゾート温泉の別荘かな？ 硫黄岳の登山口にちかい村に、火の見櫓がある。その半鐘が鳴りひびけば、じゅうぶん聞こえる」

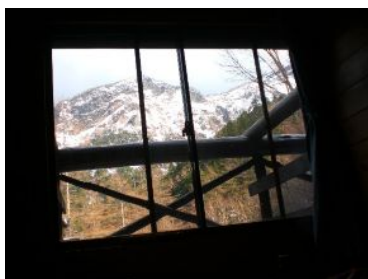
村の長老が、取り壊すまえの、火の見櫓の想いをしみじみ語っていた。……1昔（10年）まえは、大雨のあとで、土石流が上流の村を襲った。終日、鐘が打ち鳴らされていた。2昔（20年）まえは夜、別荘で子どもの花火遊びから火事がでた。3昔（30年）まえは、硫黄岳の遭難で、猟師たちの手をあつめたものだ、といっていた。それを佐和子におしえた。

「2昔（20年）まえの鐘は、子どもの花火遊び。花火は夏場のものですかね、季節がちがいます」

「火事は1年を通して、何度もあるさ」

「半鐘だけで、稲子リゾート温泉だと決めつけられるのかしら」

「別荘地の西側には、荒々しい硫黄岳がみえる。本沢ロッジからみえる山容とおなじ格好をしている。もちろん、山の大きさはちがうけれど。」



トリックとしては利用できる」

「トリック……？」

「誘拐犯はどこかしら、無人の別荘を見つけたし、5歳の佐和子さんをそこに連れ込んだにちがいない。そして、肉切り包丁を突きつけて、『部屋から一歩もでるな。出たら、殺すぞ。ここは雪の山小屋だ』と脅す」

5歳の少女なら、奥深い山小屋だと信じてしまう。

他方で、八ヶ岳山麓の3月半ばは、もはや雪解けの季節でもある。陽のあたる東側は、里山の樹木が芽を吹き、やがて花も咲きはじめる。里山だと少女がわかってしまえば、別荘から逃げだしてしまう。突きつけた包丁は、少女が西側の一室から一歩も出ないように脅すものだった。

「トリックで、逃げ出せなかったなんて、口惜しいです」

彼女が唇をかみしめた。

「あらゆる状況から判断すると、稲子リゾート温泉の別荘でまちがいない。ただ、物証はないだろうな。あまりにも歳月が経ちすぎているから」

かれはそういつてから、ケイタイの留守電を聞いた。セーフティー池袋店の事務員からで、『久能幸子先生から、渋谷区の小学校に転勤した、という挨拶の電話がありました』という内容だった。学校の電話番号も入っていた。……いましてが掛かってきたとすれば、久能教師は授業ちゅうではない。

井伊は勤務先の小学校に電話を入れた。

「ご挨拶もできず、転勤してしまいました。ご返事が遅くなりました、主人側の結婚式の参列者には、鳴野さんはいなかったそうです」

「それは、ご丁寧に」

「ただ、関係があるかどうかわかりませんが、主人には、鳴野、という名まえに憶えがあるそうです」

「覚えがある……」

「なんでも、私立中学の入試問題に、『鳴』という漢字がでたけど、それが書けなかった。その後、進学塾が主催する、難関私立中学の合格者のお祝い旅行でいった、1泊2日の八ヶ岳山麓のマイクロバスでいっしょだった、5歳の少女が、『鳴』を漢字で書けたとか。自分は入試で書けなかったから、悔しい思いをしたと、主人から話を聞かされました」

「えっ、レンタカーで、5歳の少女がいっしょだった……？ ご主人と会えませんか、ぜひ」

井伊は闇のなかで、光かがやくような情報だと思った。「わかりました。主人に連絡してみます」

久能教師から折り返し、電話がかかってきた。職場にちかい飯田橋なら、1時間ていど会社を抜けられるという。今日のきょう、会う約束がとれた。

井伊はそれを佐和子におしえた。

「わたしがレンタカーに乗っていたんですか？ まったく記憶にありません……」

「事件発生は、5歳のときだ。刃物を突きつけられたり、半鐘の音におびえたり、その恐怖が強すぎて、レンタカーに同乗していたという、記憶が飛んでしまったのさ。大人でもつよい恐怖に襲われると、その記憶が突出し、前後を忘れてしまうものだ」

「犯人は与謝野副校長の線が濃厚ですね。いい加減さん、わたしの小学校時代に担任だった与謝野先生のことですが、もしかしたら……」

「女の先生だったな。ご主人は大蔵省に勤務しているとか」

「そうです。バラの鑑賞で、この庭園にきたとき、先生が、『うちの主人はね、いま北海道勤務なの。登山とスキーが大好きで、転勤のたびに全国の山に登れると、喜んでいるんだから、イヤになるわ。妻よりも山が好きなの。わたしは北海道の大雪山に登って熊に遭遇しないかと、ハラハラしているのに、本人は平気なんですからね』と、こぼされていました。ご主人は与謝野副校長の弟さんじゃないかしら？」

「可能性はあるな。硫黄岳の登山では、副校長が大蔵省勤務の実弟から、スキー用のストックを借りてきていた。弟は冬山もやると話していた。確認できるかな……」

というと、佐和子がケイタイで、交際のある元担任にメールを送った。



ふたりは旧古河庭園から、飯田橋駅にむかった。指定された改札口では、久能好子教師の夫が待っていた。紺のスーツを着こなす。ビジネスマンのかたちは両手で、久能久雄という名刺をさしむけてきた。薬指には真新しい結婚指輪が光っていた。

「わたしは名刺を持っていません……」

佐和子も受け取った。

「結構です。あなたが蓼科ロープウェイ山頂駅にいた少女ですか。聡明な女の子だ、という印象がいまも残っていますね」

「きようはよろしくお願いします」

「塾の卒業旅行は20年以上まえのことですから、断片的にしかおぼえていませんけど、ご協力させていただきます。どこかティールームでも」

「誘拐犯が、秘かに聞き耳を立てている怖れもありますから」

井伊が事件のあらましを語りながら、地下道から地上にでた。

交差点の巨大な陸橋の階段を登り、元水戸藩の庭園・小石川後樂園に足をむけた。入園は4時までで、その時間を過ぎていた。

3人は周辺を歩いた

「山頂駅で、ボクはあなたの側にいた、大きな荷を背負った登山者が、迷子かい、どこからの来たのと訊くと、『パパは大蔵省なの、そのホテルから』と、話していました。保養所か、契約ホテルでしょうね。それを聞いたボクは、この少女の父親は大蔵省のエリートか、と憧れの目でみていました。そのころのボクは将来、一流大学を出て大蔵省に入り、大臣になることが目標でした

から」

実際は民間企業の入社だった、と久能は補足してから、

「登山者がロープウェイで下山すると、こんどは与謝野先生があなたに話しかけた。『お父さんは、あの山（縞枯山）の向こう側のスキー場で滑るから、ここに一日いても、お父さんのスキーは観ることができないよ。山の向こう側

まで車で連れて行ってあげようか』と、

たしか、そんなふうに」

「意図的なものだ」

井伊は怒りをおぼえた。

「ボクはロープウェイの真下にスキー場があるのに、わざわざ高い山を越えて滑りに行くのか、とおどろきました。いま考えれば、カントリー・スキーだったんですね」

「山頂駅で、少女の母親はいましたか？」

「記憶にはありません。……マイクロバスのなかで、あなたはボクたちと仲良くしていました」

「12歳のお兄ちゃんやお姉ちゃんに囲まれているから、少女は警戒心もなく、ロープウェイでいっしょに降り、車に乗り込んだ……」

「清里の中華料理店で、お昼を食べていたとき、ボクが前夏の夜店で買った花火を持ってきた、という、いっしょに花火がした



い、とせがんでいました。与謝野先生が、夜、誘ってあげるから、
という、すごく喜んでいました」

「その先は？」

「たぶん、ボクたちが松原湖で遊んでいたとき、与謝野先生がその
ままスキー場に連れて行ったはずですよ。松原湖からマイクロバス
に乗りこんだとき、少女はもういませんでした」

「その日の夜、宿舎近くで、花火の火事があったんじゃないかな」

「ありました。バーベキュー大会が終わると、ボクたちは花火を
して遊び、そして寢床に入った。かなり経ったころ、火の見櫓の
半鐘が聞こえてきました。宿泊所の近くの林が燃えていた」

大きな山火事になるまえに、鎮火したようだ。どうみても、バー
ベキューの残り火の不始末なのに、塾の先生方は消防署のひと
に、火事の原因を花火のせいだと説明していた。

「それを聞いたボクは、先生は卑怯だ、と抗議したら、わかつ
た、わかった、といいながらも消防署には話さなかった。結局
出火の原因はぼくの持ち込んだ花火の所為にされたままで、いま
だに悔しい思いが残っています。だから、ボクには良い旅行じ
やなかった」

「貴重な証言だ」

井伊はお礼をいった。

佐和子のケイタイが鳴った。

「……。与謝野先生のご主人と副校長は実の兄弟でした」

メールを読みながら、彼女は興奮した口調でおしえていた。

「犯行場所の特定だ。現地の稲子で、別荘を一軒ずつしらみつぶ
しに当たってみるか。しかし、これはかなり時間がかかりすぎる。
そうだと、与謝野副校長を現地に誘いだす手段を考えよう。犯人な
ら、犯行場所はわかっている」

井伊は手順を考えた。……転勤した久能幸子教師に、元の勤務
先である池袋中央小学校に電話を入れてもらう。そして、副校長
を電話口に呼びだす。

『先生、聞いてください。実は
私の夫が、進学塾時代、与謝野
先生の教え子でした。もう、び
つくりして、お電話してしま
いました』と切りだす。

そうひとつ驚きがあるんで

す。明治神宮の結婚式には、夫



側の参列者に、鳴野佐和子さんという方がいたんです。彼女は5
歳のときに、誘拐されて稲子リゾート温泉で、2週間も監禁され
ていたそうです。怖いですね。なんでも、誘拐事件が起きた日の
夜、宿舎近くで、山火事があったそうですね。バーベキューの残
り火だったとか、夫はそう話していました。

『きのう、夫は久しぶりに鳴野さんに会ったそうです。犯人の目
星ついたから、来週には犯行現場の別荘で、犯人を特定できる物
的証拠をさがしだすそうです。すごい執念の持ち主ですね。わ
たしには真似ができません』

井伊は、来週月曜の朝がいいな、と言い換えた。

「なぜ、月曜日の朝ですか？」

佐和子が訊いた。

「全校生徒の朝礼とか、職員会議とかがあるんじゃないかな？副校長の立場なら、最も拔けられない日だ。それでも、あえて稲子にすれば、犯人だという確証につながる。まあ、おれも本社で、販売促進会議があるけど……」

『いい加減さんにはいつもすみません』

「気にしない。店長のおれが出席しても、しなくても、来月のチラシ内容や価格は原案どおり決まるから、問題ない。退屈な会議さ」

「ボクも一役買わせていただきます。妻の幸子には、副校長を現地に行かせるように、上手にやらせますから」

と心強い味方になってくれた。

「与謝野副校長が真犯人だった、と確定できたら、制裁の仕方だ。もはや時効、法では裁けない。ジャーナリストの力が必要だ。芦野守さんには情報を提供し、協力してもらおう」

「メディアで報じられたら、副校長の立場だ、きびしいだろうな」久能がそういった。

……報道の仕方は時効だから匿名になるが、犯人は見えてしまふ。職場の同僚からは、これでも教育者か、最低人間だといわれる。同時に、社会的な地位も失う。夫婦関係も一気に崩れる。子どもが知れば、家庭内は凍りつくだろう。

八ヶ岳山麓は桜が満開の季節になっていた。午前9時半には、井伊佳元の運転する乗用車が、稲子の、火の見櫓までやってきた。助手席には鳴野佐和子、後部座席には芝浦達也が乗っていた。火の見櫓の鉄塔は取り壊されていなかった。『登ると危険』という張り紙には、町の文化財として残すことになりました、と添え書きがなされていた。目のまえをトラクター、野菜かごを載せたライトバン、軽自動車などが行き来していた。

佐和子が創作ノートを取り出した。

花の音が聞こえる

樹のひかり

ひかりは聞こえるのかな？

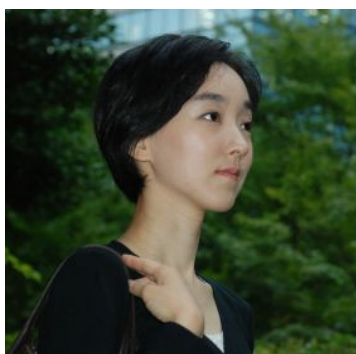
風がおう

樹がおう せせらぎが 土が

においが見えるかな？

きらめく水よ

谷をおおう木立のどこから



元ジャーナリストの芦野から、『このぼりの里』の周辺は事故車で渋滞しているから、到着は10時過ぎになると、メールが入ってきた。「この間に、山崎の奥さんに会っておくか」

井伊の車が松原湖にむかった。ペンションに着くと、たつたいま、山崎の妻は、泊り客がチェックアウトした忙しさが一段落したので、自宅に帰ったという。かれはそちらに向かった。

「犯人が与謝野だとしても、松原湖までしか目撃者がいない。そのさき少女をだれかに引き渡したとか、近くのスキー場で少女をマイクロバスから下したとか、詭弁がまかり通ると、厄介だ」
運転する井伊はふたりに、そんな懸念材料を聞かせた。

火の見櫓のまえを通り過ぎた。山崎家はその先だった。玄関は鍵がかかっていない。声をかけてみたが、返事はなかった。建物の裏側にまわると、山崎の妻は鶏舎のそばにいた。かれは佐和子と達也を紹介した。

「夫が誘拐犯だから、ここにいらつしやっ
たんでしょ」

山崎の妻が鶏にえさを与えながら、そう
いった。

井伊はそれを否定し、最も疑わしいのは、
進学塾の元講師、与謝野だといい、簡略に
根拠を示した。

「与謝野さんはまじめな方でしたよ。子ど

もたちにも慕われていたし。わたしには信じられませんが。間違
いじゃないかしら。いまは小学校の副校長になられたと聞いてい
ます。本当のところは、うちの夫がことば巧みに与謝野さんを
陥れているんですよ」



「それはないです」

「井伊さんがわが家に立ち寄られ、硫黄岳に登られましたよね。帰ってきた夫が、井伊さんの滑落事故を話していました。ふつうの登山者なら、死んでいた、生きていたこと自体が奇跡だったと。夫は冒険スキーをやるなんて、大ウソをついた、口封じに、井伊さんを殺す気で呼びだしたんです」

彼女は深刻な口調でいった。

滑落した井伊には、いまだに硫黄岳で、太ももを突いた犯人が特定できていなかったことから、その話題にふれなかった。

「……誘拐犯はあなたでしょ。私がそう問い詰めると、俺は無関係だ、ほんとうに関係ない、信じてくれと言いながら、逃げまわっていました。その日から、わたしはもう不安でいっぱいです。夫が殺人未遂や少女誘拐の犯人だったら、離婚します。子どもが可哀そうですけど、それは仕方ありません……」

山崎の妻は、家庭崩壊におびえた、沈うつな顔だった。

「誘拐事件は、花火の火事があった日です」

「それなら、夫は蓼科スキー場の民宿から帰っていました。消防団員として、火消しに参加したあと、花火の不始末は塾講師の責任だと、大きなことを言っていましたから。陰では、若い少女を蓼科から連れ帰って、どこかに監禁していたんです」

「レンタカーで蓼科から、わたしを連れてきたのは与謝野です」
佐和子が、思いつめた山崎の妻を気の毒がる口調でいった。

「あの方が犯人とは信じられません。夫をもういちど問い詰めて

みます。どんなからくりがあつたのか、と。きょうは本沢ロジジに入っていますけど」

山崎の妻はどこまでも夫を疑う態度だった。

「監禁された少女は、火の見櫓の半鐘を聞いています。稲子リゾート温泉の別荘だった、という可能性が非常に高い。どの別荘か、特定したいのだが、心当たりはないですか？」

「さあ、どこかしら？ 夫に訊いてみるのが一番なんだけど……。もしかしたら、悪魔伝説がある、C・13の別荘かしら……」

「C・13とは？」

別荘地のブロック割は、A、B、C地区と分かれている。それは端から数えて13番目の別荘で、道路際に角柱の表示がなされている、と教えてくれた。

「だいぶ昔から、C・13は不吉な別荘だといひ、気味悪がつて、だれも近寄りません」

持主は夫婦そろって日航ジャンボの墜落事故で死んだとか。その後は無人だった。あるとき、夜な夜な女の子がすすり泣いていた。それを聞いた人はみな事故に遭ったり、不慮の死をとげている、といううわさを語っていた。

「その泣き声は私だったのかしら？」

佐和子の顔には複雑な表情が浮かんだ。

「……。不動産屋は、買主に悪魔伝説がわかれば、信用問題だから、ずっと『売り家』の看板を外しています。私は怖くて、C・13の前を通ったことはありません。夏などは草がぼうぼうで、

お化け屋敷だそうです」

「悪魔伝説がわれわれに有利に働くかもな。事件後において、買手が現れず、リフォームもされていなければ、犯行を証明できる有力な証拠品が残されている可能性が高い。行ってみよう」

「でも、うわさには根拠があるはずですから、用心してくださいね」

山崎の妻は心底、悪魔伝説を信じている口振りだった。

それから30分後、井伊はケイタイで元ジャーナリストの芦野守の車を誘導しながら、火の見櫓のまえて落ち合った。

車から降りた4人はたがいに

自己紹介した。

「私の現役時代は社会部が長かった。警察まわりも多かったから、犯罪捜査の手順にはくわしい、という自負がある。記事を書くだけでなく、あなた方の捜査にも、お役に立てられると思う」



「では、犯人を追いつめる押さえどころなど、教えてもらいたい」井伊が事件の概要、犯人像、C・13の建物について説明した。

「お嬢さんは大変な目に遭いましたね。被害者は数十年もトラウマで苦しんでいるのに、犯人は時効の特典に逃げ込み、安穩と暮らしているのは、許せない」

芦野はかつてのジャーナリスト魂が燃えているようで、気迫が

感じられた。

「できれば、私の心にながく棲みついた悪魔について、書いていただければ、うれしいです」

「出稿するまえには、一度あなたには目を通してもらいます。被害者のプライバシーは守ります。犯人は匿名だが、まわりの者からは特定できるように書く」

こうした会話のあと、それぞれ乗用車に乗り込み、稲子リゾート温泉にむかった。2台の乗用車がやや傾斜のついた白樺林の舗道を登りはじめた。そのさきは別荘開発時の植林がうっそうと茂った森林になっていた。

区割りブロックの案内板、ミニストアを通り過ぎると、斜面の勾配がきつくなった。と同時に、別荘が点在する光景となった。庭木の多くが、2階建ての屋根より高く伸びていた。

A、B、Cとブロックの区画はわかりやすかった。C・13は白樺に囲まれた一軒家で、二階建てだった。4人は車中からのぞき見た。山崎の妻から聞いた、廃屋の雰囲気はあるが、建物の造りはしっかりしていた。

2台の車から、4人は降りた。それぞれが意見を出し合った。

「松原湖からさきの目撃者、物的証拠がないと、真犯人だと決め付けられない。われわれの推量があたり、このC・13が犯行現場だったとすれば、豊富な物的



証拠が残されているはずだ」

井伊の目が期待で光った。

「われわれの動きを知った、犯人の立場からすれば、犯行現場をことごとく荒らして、遺留品を破棄させることだ。最大の証拠隠滅は火を放つことだ。これが最も効果的だ」

芦野が犯罪者の心理を語った。

「与謝野はきつとここにくる。それよりも先に建物に入ろう」

「そのまえに、軍手、懐中電灯、ビニール袋などを用意する必要がある。少女の髪の毛1本でもたいせつだ。DNA鑑定で犯行現場が特定できるので、慎重に採取する必要がある」

「誘拐事件はもう時効だから、警察はそこまでやってくれないと思うな？」

達也が意見を述べた。

「物事はどう展開するかわからない。遺留品は最大限に押収しておく。記事にクレームがつき、名誉毀損で訴えられたら、それこそ裁判で、誘拐事件を証明できる物証として役に立つ」

芦野は家宅搜索なみに慎重に運ぶために、スリッパ、頭に被るネットから帽子までも整えてから、建物に入り込むべきだと提案した。それらの購入を求めて、2台の車はミニストアにむかった。

その駐車場に降り立つと、

「不法な住居侵入だと、遺留品を押収しても、後のちに証拠能力に問題が生じてくる。別荘地の管理人など、第三者の立会いがほ

しいところだな」

と芦野が井伊の顔をみた。

「おれが交渉してこよう」

井伊は店員から管理棟の場所を聞きだした。買物は芦野に任せ
た。井伊はふたりを車に乗せ、管理棟のあるAブロックに向かっ
た。

店員に聞いたとおり、管理棟は質素な平屋造りだった。頭の禿
げ上がった管理人が竹箒で、庭に散った枝垂桜の掃き掃除をし
ていた。

井伊は達也と肩をならべ、民間の調査機関のものだと名乗った。
そして、C・13で、遺留品を押収したいので、立会いをお願い
したいと申し出た。

管理人はIDカードの提示すらもとめず、民間じゃあ、だめだ、
警察の許可がないと見せられないと、頭か
ら拒絶した。

「事件はもう時効となつてしまった。だか
ら、警察は動かない。被害者から民間の調
査機関に、真相究明をゆだねられた。報道
関係者もきている」

あそこは維持費が何十年も未払いだから、
管理外だ。頑なに拒絶する管理人は、桜
の花弁を掃いてばかりで、視線を合わそうとしなかった。

「犯人を特定するためにも、協力を願いたい。管理人の立会いは



どうしても必要だ」

C・13の所有者はいま天国にいる。あの世にいつてまで許可
を取ってこれない。

管理人は悪魔伝説を信じ、途轍もなくおそろしい建物だと怖が
っている節があつた。井伊にはそれが読み取れてきた。

「立会いはなしで結構。合鍵を貸していただければ、それだけ
で充分。責任はこっちで持ちます」

何かあつても知りませんよ。後のちに祟りがあつても……。
そんなふうに分れ、管理人から、C・13の鍵が手渡された。

「犯人は別荘のカギを持っていたのかな？」
達也があらたな疑問を口にした。

「どこの別荘も、一般住宅とちがひ、貴重品は置いていない。利
用者が帰り支度を急ぐあまり、カギのかけ忘れだつてあり得る。
その気になつて探せば、一軒や二軒はあるものだ」

日航ジャンボ墜落事故から、誘拐事件まで数年が経っている。
この間、年に3回、進学塾の特訓合宿がおこなわれている。講師
の与謝野が散策のさなか、無人で無施錠の別荘を知り得たとして
もおかしくない

「おや、あの青い車は？」

井伊の視線が一台の青い乗用車を捉えていた。管理棟のまえ
を通り過ぎていく。

「なぜ、三枝がここに？」

運転者は横顔だったが、東中野店の三枝店長にまちがいない。

「急いで乗って」

井伊は青い車の尾行をはじめた。追跡ちゅうの車はセーフティの三枝店長だと、ふたりに教えた。後部座席の達也には芦野に連絡を取らせた。

（きょうは本社で販売促進会議のはずだ。鬼頭部長にはたてつけない三枝店長が、なぜこの場所にきているんだ？）

練馬ナンバーの青い車がAから、Bブロックへと九十九折りの道をのぼっていく。車間距離は保ちつつづけた。

「久能幸子先生から、与謝野副校長を呼び寄せたつもりだったが、なぜ三枝店長がきた？」

奇怪な予想外の展開から、井伊の頭脳は忙しくなった。いろいろな推量が浮かぶが、三枝の真の狙いは読めなかった。

三枝の青い乗用車がCゾーンに入った。10、11、12のまえを徐行していく。C・13の建物のまえで停まった。車窓から凝視しているようだ。10分ほど

と経つと、三枝が車から降りてきた。汚れた窓の外から、内部をうかがう。

「いい加減さんの同僚が誘拐犯だったんですかね」

達也がいった。

「信じられないというか、情けない。21年前に、山頂駅で少女の佐和子さんを誘拐し、監禁した男が、わが社の店長だったとは。……東中野店の従業員がこ



れを知ったら、どういう心境になるのか。セーフティの全従業員は怒り、肩身の狭い思いをする。情けない話だ」

「いい加減さんの気持ちはわかるな」

達也がいった。

「同僚でも誘拐犯ならば、許せない。社会的に罰する」

井伊は自分の心に冷徹さをもとめた。

三枝はやがて青い車に乗り込み、立ち去った。

「犯人は三枝か、与謝野か。その結論は現場にある」

芦野がすぐ別荘に踏み込もうと提案した。

「了解だ」

かれらは2台の車をBブロックの目立たない場所に駐車させた。そのうえで、4人は徒歩で、C・13にもどってきた。芦野からはそれぞれに手袋や帽子などが手渡された。

井伊が玄関の鍵を解除した。その扉を開けると、カビや埃や不快な悪臭などが一気に鼻腔を突いた。土間に踏み込むと、白い埃が舞い上がり、全身をつつんだ。上がり框にもあつく埃が積もり、得体の知れない虫が這う。

一階の西側にはトイレ、浴室、納戸があり、2畳の納戸はスポンジのように、ふわふわだった。そこには誘拐に関係するような遺留品は見当たらなかった。埃で汚れた窓からは、うつそうとした樹木しか見えなかった。

4人は薄暗い階段をゆっくり慎重にさがっていく。ペンライトの光芒が伸びていく。

「悪魔伝説の舞台に立ったような、気色の悪さだな。佐和子はこのなところに閉じ込められていたのか」

達也がつぶやいた。

階段を登りきると、中央が廊下で、右が西側の部屋、左が東側の部屋、突き当たりにはもう一室あった。

井伊が西側の引き戸を開けた。畳のうえには、食器や水筒が転がっている。残飯はすでに虫や小動物に食べられてしまった跡があり、すべてが空だった。

「ここは誘拐事件の現場にまちがいない。すぐには室内には入らず、何を押収するか、じっくり見定めるべきだ」

芦野が全員の足を押しとどめた。

「2階の窓からは、かろうじて硫黄岳が見える。おおかた21年前は樹木が低く、窓から白雪の硫黄岳がすんなり望めたはずだ」井伊は山容を凝視していた。他方で、芦野がペンライトを照らし、室内を細かくみていた。そして、みんなの視線を三方の壁に集めた。

そこには少女が爪をペン代わりにしたと思われる、文字と似顔絵が彫られていた。芦野が一眼レフのカメラで撮影した。そのうえで、液晶モニターで、文字を拡大してみせてくれた。乱れた文字からは、『ぱぱ、ママ、たすけて』『こわいよ』『あくまが、またきた』『こんなごほんはやくたべたくない』という内容が読み取れた。ほかの文字は判読が不能だった。

「この部屋がにくい」

唇をかみしめた彼女の横顔をみると、過去の恐怖が如実によみがえっている。だれの目にも、彼女の痛恨の心情が読み取れた。芦野が3ヶ所の似顔絵をも撮影した。佐和子が、顔の特徴から父と母だと認めた。他にも20代らしき男性が描かれていた。三枝か、与謝野か。あるいは山崎か。現在の3人の顔から類推しても、判別できなかった。

「似顔絵は決定的な証拠にならないな」

井伊がつぶやいた。

押入れの襖の棧が折られて押し倒されていた。少女の佐和子が精神的に追い込まれ、自暴自棄から破壊したものだろう。押入れの片側は布団が押し込まれ、となりはトイレ代わりだったと思われる。空間のなかには排泄物の跡があった。

芦野がフラッシュを発光させた。

「幼い子を親から切り離し、2週間も閉じ込め、トイレも使わせないなんて、人間のやることじゃない。5歳の少女になんの非があったというんだ」

井伊が怒りの声でいった。

「わたし毎晩、怖かった。毎日、死にたかった」

佐和子が泣きだした。痛々しく、

哀れだった。

「よくがんばったな、佐和子は……」

達也が涙声で、嗚咽する彼女の肩を抱き寄せた。



「芝浦くん、この現場をよく見て、将来にわたり、佐和子さんを大切にやってやることだ。5歳で、こんな劣悪な境遇におかれ、そのうえ、心の悪魔には長く付きまとわれた。自殺していてもおかしくなかった。よくがんばったよ」

「過去の不幸は、ボクが取り返えさせます」

「そのことばが佐和子さんの心の翼になる」

井伊がいった。

これらの感情から距離をおく芦野が、電気店から掃除機を買ってくる段取りを話しはじめた。

「部屋のゴミをすべて掃除機で吸い取れば、被害者と犯人の髪の毛などが、収集できる。お金はかかるが……、民間人でも、調査機関に依頼すれば、DNA鑑定もできる。とくに布団などには頭髮がついているはずだ」

芦野がそれらの段取りなどを指図していた。

すると、別荘の戸外に、車が停まる気配がした。4人の神経はそちらに向けられた。

玄関の扉が開く音がした。犯人がやってきた。だれもが信じて疑わなかった。

(ここに居てはまずい)

井伊の目配せから、西側の引き戸をすばやく締め切ると、4人は東側の部屋に移った。足音が階段をあがってくる。どんな行動に出てくるのか。：



：犯人が西側の部屋に入り込めば、拙いことになる。

こちらが過去の髪の毛を収集しても、犯人は21年前のものじゃない、きょうこの日のものだ、つい最近のものだ、と抗弁するだろう。それこそ証拠隠滅になってしまう。

西側の部屋が開けられたようだ。室内の遺留品を物色しているのだろうか。

(どこで飛びだすか)

井伊はそのタイミングを見計らっていた。

3、4分後だった。犯人と思われる人物の足音がこちらの部屋に向かってきた。ドアが開けられた。一眼レフを構えていた芦野がフラッシュを放った。出鼻をくじかれたように、男はたじろいだ。それは与謝野副校長だった。

井伊はすかさず一歩前にすすみでると、間を入れず、

「ここでお会いするとは奇遇ですね。なんの目的があつて、この別荘にこられたのですか？」

と訊いた。

「決まっているじゃないですか。誘拐犯が三枝だから、ここに呼びだして告白させるためですよ。3週間前の、本沢ロッジでは、井伊店長の追及の下、真犯人の三枝は醜く罪から逃げまわっていた。あの態度は許せない。告白させて、社会的な制裁を加える」

「なぜ、三枝が犯人だと断定できる？」

「実は、私も誘拐事件の一部に関わっていた。三枝には少女誘拐

の下心があつたとも知らずに、誘拐の片棒をかつがされた。21年前のロープウェイ山頂駅で、三枝にたのまれ、レンタカーで、少女をここに連れてきた。まさか2週間も監禁するとは思ってもみなかった」

「山頂駅で、あなたは少女の父親が大蔵省の勤務だと知った。一方で、**寒弟は大蔵省**に入っている。あなたは長年の希望も叶えられず、**歪んだ劣等感の下**にいた。社会への挑戦で、少女誘拐の完全犯罪を思い立った。そして、罪もない少女を刃物で脅し、この別荘に閉じ込めた」

「それはいくら何でも、言いすぎだ。あのときの私は、墨田区の小学校の赴任も決まっていたし、心は晴れ晴れしていた」

「それはどうかな。あなたはいま、いきなり西側の部屋にやつてきた。それはあなたが、少女を連れ込んだから、この別荘を知りつくしているのだ」

「偶然だ。三つのうちの一部屋だ。偶然、その部屋に入ったらといて、犯人扱いにするなんて。井伊店長はどうかしている。あの夜のことを聞かせよう。三枝に頼まれて、バーベキュー大会が終わると、残り物をぜんぶ焼きなおして、運んできた。そして玄関先で、三枝に渡した。そのとき、少女は2階の西側にいる、これだけのご馳走だ、喜ぶぞ、といった。それだけだ。部屋に上がったのは今日がはじめてだ」

「それはどうかな？ 誘拐事件の夜、進学塾の宿舍近くの林が燃える火事があつた。あなたの気持ちが少女の食べ物にいつてしま

い、バーベキューの火の不始末から火事になったのでは？」

「出火は花火によるものだ。消防署も、そう断定した。火事の次の日は、他の講師や塾生といっしょに東京に帰ったから、その先はいつさい知らない」

「なぜ、きょう、あなたは別荘にこられた」

「あなた方こそ、なぜ今日、この場に？ 私は小諸で、長野県 of 教育施設の視察があつたからです。車だと、そう遠くもないし。私の都合にあわせて、三枝を呼び出している。私が東中野店に電話をかけたのは、きのうの午前ちゆうだ」

三枝店長には、稲子リゾート温泉に來い、もし来なければ、セーフティーHP（ホーム・ページ）に。硫黄岳の殺人未遂事件の一部始終を書き込むぞ、とつよくいった。少女誘拐事件は時効成立だから、書き込みは名誉毀損にもなりかねない。だが、硫黄岳はあすにでも、警察は逮捕できる。

三枝は明日は大切な会議があるな、と渋っていた。ことの重大さがわかっていない男だから、

『硫黄岳の山頂直下で、同僚の井伊店長の太股を、ピッケルで刺して、殺そうとした人物がセーフティーにいる。罪状は殺人未遂だ』



と東中野店にFAXを送ってやった。

「三枝は予想通りやってきた。さつき、稲子の火の見櫓で会ってきたばかりだ。私がいまから、C・13の別荘で物的証拠をつかんでくるから、少し待っている」と、松原湖のほうで待機させている」

「それはかなりできすぎた話だ。硫黄岳で、おれの足を突いたのは、あなたのストックじゃないのかな？」

それについては、あまり確信はなかった。

「私が犯人？ 疲労困憊から、ケルンの側で腰を落としていた。手元から放れて流れたストックを拾って、届けてくれたのは井伊店長、あなただ。ケルンは崖っぷちから5、6メートルは離れている。ストックを投げないかぎり、届かない。投げていれば、ストックはアイスバーンのうえで、また流れだす」

「たしかに、腰を下しては突けない。あなたの言い分が正しい。しかし、硫黄岳の犯人と、少女誘拐事件の犯人とは必ずしも同一とはかぎらない。別人だってありえるさ」

「同一犯に決まっている。三枝は、誘拐犯を追及する井伊店長を滑落死として、殺そうとしたんだ」

「硫黄岳のことは、おれから三枝に直接問い詰めてみる。問題は別にある。あなたはセーフティー池袋店のパン売場で、久能先生から『鳴野』という漢字を訊かれたとき、すらすらと『鳴野佐和子』という名が出てきた。21年前にレンタカーにいちど乗せた、少女の名まえがそうかんたんに浮かぶとは思えない。それは最近の

彼女を知っているからだ」

井伊は横に立つ、達也に肩を抱かれた佐和子をみた。

「もちろん、彼女は知っていますよ。義妹の教え子だから。写真も見せてもらったことがあります。与謝野家の正月は毎年、恒例として私の家と弟の家とで、交互におせち料理を囲んでいる。その折、義妹から、小五の教え子がいい詩を書いているのよと、年賀状をみせてもらったことがあるし、旧古河庭園で撮った写真も見せてもらった。だから、最近の彼女の顔も知っている」

「その旧古河庭園では、詩をつくる彼女を階段のうえから突き落とした……？」

「あなたは、なにかと、私を犯罪者にしたがつている。疑うなら、三枝だ。あの人物は裏表がある。そういう人間こそ、犯罪者だ」

「誘拐の真犯人の特定は、もはや時間の問題だ。あなたのよう

に三枝に告白を求めるのではなく、われわれは科学的に証明してみせる。誘拐事件の現場となった、この別荘には犯人の遺留品が豊富にある。それらを物証として、一つひとつの収集する」

「そういうことは警察に任せればいい」

「警察に持ち込んでもムダだ、少女誘拐事件は時効だ」

「だから、三枝を告白させるしか方法はない」



「民間の調査機関にだせば、DNA鑑定もできる。遺留品の分析や解析もできる。決定的な証拠をつかみ、犯人を断定してから、メディアで報道する」

「私は教育者だ。間違った報道をされると、命取りになる」

「なので、現場はたいせつに残しておきたい。われわれは今日のところ、いったん引き上げる。あなたも、現場保存でお引取りねがいたい。一両日ちゅうには民間の調査機関がこの現場に入る」

井伊はあえて威厳に満ちた口調でいった。

「そんな指示には従わない。こっちも濡れ衣を晴らす権利がある」

「事件の被害者は鳴野佐和子さんだ。だれをさておいても、彼女には第一優先権がある。この別荘のものを持ちだせば、証拠隠滅で告訴する」

「誘拐事件は時効だ」

「管理人から鍵を借りてきたのは、このおれだ。明日いっぱい、立ち入り禁止にする。守らないと、住居侵入罪で110番する」

井伊が妥協しない態度をみせると、与謝野は渋しぶ従った。

全員が別荘から退去した。

井伊と芦野の車はカムフラージュで、松原湖を一周してきた。

そして、別荘のまえで、4人それぞれが意見を出し合った。……

犯人が与謝野にしろ、三枝にしろ、証拠隠滅の最も有効な手段は、別荘の放火だ。実行するとなれば、今夜だろう。この推理で、4人は合致した。

「別荘の放火に対応しておかないと、山火事になってしまう。こはひとつ走り、佐久市内のホームセンターから、消火器を購入してくるか」

井伊がポケットから車のキーを取りだした。

「消防署に事前に、話されたらどうですか。そのほうが大事にならない」

達也が提案した。

「それはまずい。消防から警察に連絡がいくし、ずいぶん大掛かりなものになる。消防署員や消防団員がこの周辺を警戒したら、誘拐犯は近づけない」

芦野がいった。

「そうですね。ボクの意見は撤回します」

こうした話し合いから3時間後、森林のかなたに陽が沈み、夕焼け雲が真っ赤に燃えていた。

井伊たちは先刻からC・13の遠く近く、樹木の陰などで別荘を見張っていた。やがて茜色が薄れてきて、暮色がまわりを支配した。同時に、視界の距離が狭まった。

車のライトがこちらに向かっていた。C・13の前で停まった。乗用車からひとりの男が降りてきた。ずいぶん周りを気にしている。

「放火の現場写真が取れたら、現役時代ならば、特ダネだ」
芦野の目が光っていた。



男はトランクを開けた。取りだした、ポリタンクの液体を玄関先に撒きはじめた。灯油の臭いがただよう。

ライターを取りだす。

「いまだ。押えろ」

井伊と達也が駆け寄った。

男は火を放っていた。炎がブーツとあがった。火は灯油を舐めて勢いを増す。

井伊が赤い消火器の安全ピンを抜き、レバーをにぎった瞬間、ホースの先端から、白い粉の消化剤が噴きだした。しかし、火の勢いが勝っていた。灯油の火炎が強すぎるために、一本では消しきれなかった。

この間に、達也がタックルで、放火犯を捕まえていた。

佐和子があらたな消火器をもって駆け寄ってきた。それを受け取った井伊は、彼女に119番をかせさせた。

消化剤が屋根の庇に向けられた。火炎はパチパチ音を立て、建物のみならず、まわりの木々に燃え移っていく。

火の見櫓の鐘がカーン、カーンと鳴りはじめた。

消防車や警察車両がやってきた。それらの数は増えるが、C-13の別荘は火に包まれ、もはや全焼だった。消防車から本格的な放水がはじまった。

パトカーに乗せられたのは、与謝野副校長だった。

翌朝、池袋店に出社した井伊は鬼頭部長から、販売促進会議をサボったといい、電話で恫喝された。3月の夏休みボケの後遺症

か、といつまでも怒鳴っていた。

週が変わり、三枝店長とともにセーフティー本社に呼び出された。ふたりして始末書を書かされた。今後において会議を無断欠席した場合は、自主的に店長を退きます、と一筆書き加えさせられた。

本社から出てきたふたりは、駅にむかった。並木道がつづく。三枝店長は始末書の一文に拘泥していた。

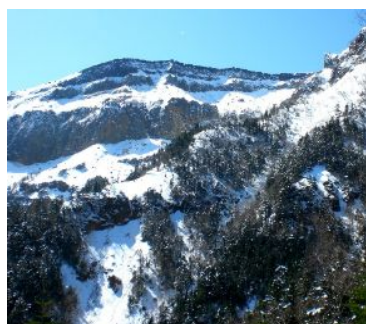
「気にすることはない。始末書では常套句だ。法的な効力なし」「いい性格だな。俺は入社してはじめての始末書だ。心に重く圧しかかる。いい性格といえ、俺が硫黄岳の山頂直下で、ピッケルで井伊店長の太ももを突いたのに、それにたいしての、恨み言もいわないし」

「おれが逆におまえの立場なら、おなじような仕返しをするさ。事実無根のうえ、少女を誘拐した犯人だと決めつけられたら、ムカムカして、この野郎、とばかりに……」

「言い訳になるが、あれはたんなる脅しのつもりだった。わざと振りまわしたピッケルが足にあたってしまった。井伊店長が転倒し、断崖絶壁から、姿が消えた瞬間、仲間を殺した、とぞつとした。全身のふるえが止まらなかった」

「まさか、生還するとは思わなかったようだな」

「……ほんとうに死んだと思った。顔をみたときの安堵は、生涯



忘れられない。あとで聞けば、標高差200メートルの滑落だ、生きていたほうがふしぎなくらいだ」

「死神はどうもおれを毛嫌いしているらしい」

「ただ、俺は天に誓^{ちか}つても、前の晩のテントは狙^{ねら}わなかったぞ」「三枝店長でなければ、山崎さ。誘拐犯あつかいされた、というおなじ理由からだろう。あの晩は酒も入っていたし、腹いせで山小屋に備えられた鎌でも持って、脅^{おど}しにきたんだろう。与謝野の力量じゃ、雪山のテントまでやってこれない」

「それもそうだな。テントの場所はわからないが、与謝野は真夜中の雪上を歩けない。……人間、追い込まれると、理性を失いやすいな。今回のことづくづくそう思った。与謝野から唐突^{とうとつ}に、東中野店に電話が入ったときから、俺の心は乱れつづけた」

「どんな内容の電話だったんだ？」

「硫黄岳で、井伊店長を殺そうとしたな、その現場をみたぞ。殺人未遂は黙っておいてやる。その代わり、稲子リゾート温泉にある別荘に火をつけてこい。それが嫌なら、おまえの会社のHP（ホームページ）に、同僚への殺意^{きがい}と、殺人未遂の一部始終を書き込むからな、という脅^{きょう}しだった」

「会社のHPとは強烈^{きやうれつ}だな。どう答えた？」

「稲子リゾート温泉など知らないというと、硫黄岳や天狗岳への登山口と火の見櫓の中間から脇に入った道だという。そんなところはわからないし、何のための放火だと聞いてみた」

与謝野の答えにはおどろいた。……。21年前の誘拐事件の証

拠隠滅を図るのだという、とんでもない話だった。井伊店長が3人のうちの一人が誘拐犯だといっていたのが、当たっていたと思った。

放火などできないと突き放した。あいてはHPの書き込みを執拗^{しつぱう}にもちだす。硫黄岳の弱みがあるので、つよく押し返せず、とりあえず現地に行く、と曖昧^{あいまい}に約束した。

「すると、与謝野が東中野店のFAX

番号を訊いてきた。それをおしえると、稲子の火の見櫓からの地図、別荘への略図が送られてきた。手書きだった」。

「C・13も書かれていたか」

「最初はスケッチだけだった。これじゃあ、判らないと、稲子に行きたくない気持ちから、そう答えると、別荘地番号が略図にあらたに加えられる、FAXで送られてきた」

「C・13だな」

「そうだ。おれはそれをもとに出向いた」

「C・13は犯人しか知りえない、犯行現場だ。そのFAXは犯人を決定づける、重大な証拠品だ。実物はどうしている？」

「腹も立つし、棄てようかと思つたが、念のためにと、店長机に入れている。そういえば、FAXは勤務先の小学校から送られてきていた。時間も印字されている」

「ほんとうか。放火の脅迫資料を小学校から送っていたとはな。



それが世間にでると、教育者たるものが……、と致命的だな^{ちめいてき}」

井伊は信じがたい気持ちだった。

「俺はHPやFAXで脅^{おど}されて窮^{きゆう}地に立^たった。……放火が成功すれば、殺人未遂罪が闇^{やみ}のなかに消せると、淡^{あわ}い期待をもった。実際、本気で考えて、俺は入社して、はじめて会議をサボり、稲子まで車を走らせた。現地に入ってから、迷いに迷っていた。最後は良心に逆らってまで、放火はできなかった」

「おれを含めた4人が陰に隠れて、三枝の行動を見ていた」

「そうだったのか、それは知らなかった。もし放火していたら、逮捕されて刑務所行きだったのか。そうなれば、セーフティーは懲戒免職。妻子は退職金もらえず、路頭に迷うところだった」

「よく踏みとどまったな。妻子のためにもよかった」

「そのさきも話しておくよ。現地入りしていた与謝野と、俺は火の見櫓で落ち合った。放火をつよく強要された。この男に諂^{べつ}うよりも、井伊店長に直接、告白したほうが良いと考えて、放火はやれないと、断った。その場で、与謝野を袖にし、東京に帰ってきて、正解だった」

ふたりは駅までにきた。

「俺はこれから飯田橋に寄っていく。ここで別れよう」

「大丈夫か。たつたいま、鬼頭部長から、まっすぐ店に帰り、仕事につけ、といわれたばかりだぞ。舌^{した}の乾^{かわ}かないうちだというのに」

「被害者にちよつと会って、心の翼を確認するだけさ」

約束より、45分ほど遅れて、飯田橋駅に着いた。改札口の外では、折り畳み傘をもった佐和子が週刊誌を読んでいた。

「お待たせ」

「やったぱり遅れましたね。もう、この時間ですから、小石川後樂園は閉まっています」

「きょうは庭園で歴史の能書きを語ってられない、時間もないし……」

ふたりは神楽坂の方角へむかった

「これが芦野さんの特別寄稿が載った週刊誌です、読みましたか？」

「読んだよ。店の雑誌売場で、立ち読みだったけど」

記事は別荘の放火事件よりも、21年まえの少女誘拐事件が中心となっていた。完全犯罪の証拠隠滅^{はか}を図るための、放火事件だったと、ミステリータッチで運ばれている。写真は少女の爪で描かれた似顔絵が使われていた。

「ジャーナリストって、いい加減ですね。わたしには事前に原稿をみせるといいながら、出稿してしまつて。それに、この似顔絵は父の顔です」

「被害者しか知らない事実だ。ブラックユーモアだな。元記者にすれば、人生最後の特ダネで、気が急いたのだろう。佐和さんの似顔絵がもつと上手だったら、芦野さんが撮影した写真が犯人特定の決定的な証拠になっていた……。ところが、残された絵か



らは3人のうち、誰の顔か判断つかなかった」

「絵は苦手なんです、いまでも……」

「天は二物を与えずか」

少女誘拐事件の全貌が芦野のペンで、世にでたからには、与謝野が出所しても、鳴野佐和子をつけ狙うことはない。口封じの必要はないのだから。

雨が降りはじめた。ふたりは雨宿りで大樹の枝の下に入った。

「……。与謝野の奥さんやお子さんのショックを想うと、気の毒です。教育者の夫が放火犯で捕まり、この記事から5歳の少女誘拐事件の犯人だと、わかってしまうわけですから」

「佐和子さんは心が優しくすぎる。」

21年間苦しみぬいたんだ。犯人をもっと恨んでもいい。罪を憎んで、人を憎まずにしてもだ」

井伊は創作ノートの一遍の詩

『逝く秋』を思い浮かべた。

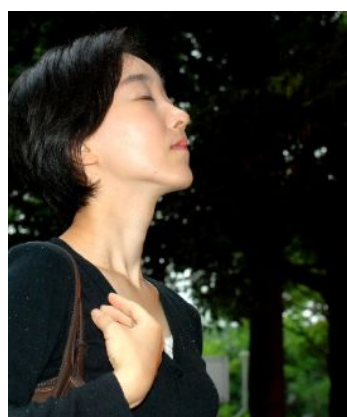
いのちの芯が裸になってゆく

こんなとき

これから生まれてくるいのちと

死んでゆく人の魂の

ありかを考える



「罪は憎みますが、小学五年生の担任だった、与謝野先生とは会

いにくくなりました」

「やむを得ないな」

「与謝野の魂はいまや死に体だ。進学塾の講師だったとき、蓼科ロープウェイ山頂駅で、『パパは縞枯山の向こうで滑るから、夕方まで帰ってこないよ』とちよつと少女をからかった程度だったと思う。それが重大な犯罪につながっていき、21年後には社会的な地位も、家族関係も失う。また、兄弟どうしの関係も悪くなる。最初に声がけた時点では、まったく予想だにしていなかっただろうな」

「5歳のわたしが、父のスキーを見たくて、それを信じてついていったばかりに……」

「しかたないさ。まわりには12歳の子どもたち6人がいたし、5歳の少女には警戒心が起きなかった。それがこの事件の特異性だ。おおきな事件でも発端は、こんな偶発的なものだと思う」
事件の発生もそうだったが、解決も、大蔵省という一つのキーワードというか、一本の線につながっていた。だから、複雑な犯行が一つひとつ解けていった。

「その実、最後の最後まで、3人のうち誰が真犯人かわからなかった。与謝野が放火しなければ、おれはいまだに三枝犯人説が心のなかで渦巻いていただろう」

「解決は偶発的なものではありません。いい加減さんの洞察力が、犯人よりも勝っていて、21年の歳月の空白を埋めながら、犯人を追い詰めていったんです。事件は時効でも、『証拠隠滅し

なければ、大変だ』と犯人が焦り、悪魔の仮面が剥がれてしまったのです」

「まあ、多少は作戦勝ちかな。新宿の大学病院に謝罪と見舞いにいったとき、悪魔追撃の依頼を引き受けた。内心は途轍もない難解なはなしを引き受けてしまったと後悔していたが、まさか、こんなふうに解決できるとはな」

かれはいまだに信じられない気持ちだった。

「わたしは悪魔がつかまる瞬間を見たとき、心がすっと軽くなりました。それは悪魔が心から消えた瞬間でした」

「達也くんが取り押さえたところを、自分の目で確認できた。それがいちばんの収穫さ」

「もし、池袋の裏稼業人さんに、悪魔の追撃をお願いできなかったら、わたしは一生、暗い人間で終わっていました。心に翼を下さって、ありがとうございました」

彼女が微笑んだ。

「天使のような翼だ。きょうはこの辺で失礼する。芝浦くんと幸せにな。新婚旅行記はインドがお勧めだ」

コートの襟を立てた井伊が、雨宿りの大樹の下から踏みだした。

「いい加減さん」

「なんだ？」



「夕食を、一緒にしませんか。あちらの神楽坂で。もしかしたら、これでお別れになるかもしれませんから」

「女性に誘われて断るのは本意じゃないけど、夕方のスーパ―は忙しい。そっちがおれの本業さ」

「そうですか。では、この傘に入ってください。駅まで送っていきます」

「いや、おれは雨が好きなんだ」

井伊が濡れた歩道を急いだ。

【了】

写真モデル・森川詩子さん

詩集「受容」(有)本多企画・小林陽子さん(詩人)

写真提供(ロープウェイ関連) (株)ピラタス蓼科ロープウェイ

写真提供(インド)・インド政府観光局

【協力者および提供者は、本文とまったく関係ありません】